

「その人らしさの尊重」とは何か

—ある認知症患者の11年から—

大阪市立大学 木下衆

1 目的

「その人らしさ（個別性）を尊重し、死に向きあうよりも生に向き合った考え方」に立つ。——これは、現在は解散した X ホスピス協会（以降、「協会」）の代表が、組織の考え方として機関誌に記したものだ。協会は、認知症患者の在宅での暮らしと看取りを目指し、1980年代末からヘルパー派遣事業を展開した。この「その人らしさの尊重」は、日本では特に2000年代以降、認知症ケアのキーワードとして用いられる（Kitwood 1997=2005）。80年代から活動していた協会はいわば、認知症患者のその人らしさの尊重を試みた、先駆者の一つとして位置づけられる。

しかし特に認知症ケアにおいて、患者のその人らしさの尊重とは、いったい何を指すのか。この問いは、日常的ケアにおいてだけでなく、特に患者の終末期において、介護者たちのあいだで浮上する。協会のメンバーたちは、こうした問題に悩みながらも、介護を続けていた。

そこで今回は、協会のサービスを2000年から利用し、2011年に死亡したA子さんのケースを事例に、分析を行う。介護者たちは、いったい何をすれば、A子さんのその人らしさを尊重したことになると考えていたのか。彼らはどのようなケアを行い、そして何に悩んでいたのだろうか。

2 方法

今回は主に、3人の元協会メンバーから調査協力を得た。A子さんの夫であるB氏、協会の事務局長を務めたC氏、そしてA子さんのケアマネジャーを務めたD氏である。調査は2017年に開始し、3人からそれぞれ協会の機関誌や会議資料などの文書資料の提供を受け、それに基づいたインタビュー調査を実施している。当日の報告では、文書資料とインタビューデータの双方を引用する。

なお調査にあたって、匿名化した上で、学術目的でデータを発表することの許可を受けている。

3 結果

当日は特に、二つの点を議論する予定である。

第一に、協会が患者の在宅での暮らしに積極的な価値を見出した、その論理について。協会は、主婦であったA子さんの役割や能力（家事）を保てる場として、在宅生活を重視していた。

第二に、終末期の延命治療を巡って浮上する、患者本人の意思という問題について。A子さんは2009年、胃ろう増設手術を受ける。この段階で彼女は、意思表示が困難となっていた。そこで協会の専門職は、夫であるB氏に彼女の代弁者となることを期待する。しかし一方で彼は、妻の「心の中が知りたい」、言い換えれば妻の「心の中」が分からないという問題に直面することになる。

4 結論

ここから、認知症患者のその人らしさの尊重を目指した介護の、特徴的帰結が指摘できる。そうした介護は、尊重されるべき意志のある存在として患者を想定している。つまり患者は、意志表示が困難な状態になっても、意思がない存在とは捉えられない。だからこそ介護者達は、患者には自分とは違う意志があったのに、それをくめなかったのではないかという、独特な後悔を抱えるのだ。

文献 Kitwood, T., 1997, *Dementia Reconsidered: the Person Comes First*, Open University Press.

(=高橋誠一訳, 2005, 『認知症のパーソンセンタードケア—新しいケアの文化へ』, 筒井書房)